

平安中後期の仁王会と儀式空間

野田 有紀子

はじめに

仁王会とは、百の高座を設け百人の僧を屈して「仁王般若経」を講説し、鎮護国家を祈念する法会である。日本では『日本書紀』斉明六年（六六〇）五月条に「有司奉^レ勅、造^二一百高座・一百納袈裟^一、設^二仁王般若之会^一」とあるのが初見とされ、以後、宮中・京内・諸寺・諸国で広く催されるようになった。朝廷の仁王会はしだいに恒例化・制度化されていき、平安中期以降には「臨時仁王会」^①「春季・秋季仁王会」^②および「一代一度仁王会」^③が行なわれるようになっていく。これらの仁王会は会場数や行事規模が多少異なるものの、儀式次第や設営についてはほぼ共通する。

仁王会の儀式次第や設営は「大極殿儀、如^④御齋会」「上卿以下座併如^⑤御齋会」「装嚴大略如^⑥御齋会」のように、毎年正月八日から行われる御齋会に准じる。ただし御齋会には見られない平安中後期における仁王会の大きな特徴のひとつとして、複数の会場で同時に開催される点^⑦があげられよう。仁王会は大極殿のほか清涼殿・

紫宸殿・諸院宮等でも行われ、一代一度では「京中卅一堂」ものの規模で開催される。会場や規模は時代によって変化し、公卿は各会場に配分され、さらに会場間を移動して参列するようになる。よって平安中後期の仁王会は儀式空間の位置づけや変化と密接な関連がある儀式と考えられる。

仁王会についてはこれまでおもに創始時期の検討や、即位儀礼としての意義、国家と仏事との関係について、または仏教史的な観点から研究されてきた。^⑧しかし平安中後期の宮中儀式のひとつとして準備から当日までの流れを整理した論稿は少なく、会場や参加者の変化の問題を検討したものもわずかである。そこで本稿ではまず平安中後期の仁王会儀式の概要を理解するため、第一章で寛仁元年（一〇一七）一〇月八日に行われた後一条天皇一代一度仁王会（以下「後一条度」）の準備過程から当日までの儀式次第を、検校藤原実資の動きを中心に、他の実例や儀式書の記述ともあわせて検討する。つづく第二章ではこうした平安中後期の仁王会儀式次第に見られる空間的变化を指摘する。以上の作業により、仁王会の儀式に表された平安

中後期における儀式空間の特質を探ろうと思う。

第一章 寛仁元年一代一度仁王会の準備と儀式次第

本章では大納言藤原実資が検校（仁王会においては行事のうち参議以上のこと。またとくに上卿を指すことが多い）を務めたことにより、準備段階から当日までの経過が『小右記』で詳しくたどることができる。後一条天皇一代一度仁王会の儀式次第を、他の実例や儀式書を参照しつつ検討する。以下、とくに断らない限り出典は『小右記』による。なお平安中後期の一代一度仁王会開催日は【表】にまとめた。また一代一度と春季・秋季および臨時仁王会は儀式次第がほぼ共通するため、必要に応じて関連史料を参照する。

後一条天皇は長和五年（一〇一六）正月二十九日に三条天皇から受禪し、同年十一月一日に大嘗祭を行った。平安中期において一代一度仁王会は大嘗祭の翌年に行われるのが通例であったため、今回も翌寛仁元年八月一日に前摂政道長が大外記小野文義に前例を勘ぜしめ、検校を実資に依頼する旨の内議があった。翌一日、実資は大外記文義を召して一代一度仁王会の件について問い、「天慶例」を勘進するよう仰せた。「天慶例」とは天慶一〇年（九四七、天暦元年）四月二五日に行われた〔村上度〕のことで、『北』五にも前例として引勘されている。深夜、実資は摂政頼通から正式に一代一度仁王会検校を依頼されて受諾するが、儀式次第は「天慶例」を参照すべきで、まず大臣が検校以下行事を定め、その後検校が次々のこと

を定めるのがよいと伝えさせた。⁽⁶⁾

(1) 仁王会定

当初八月一八日に予定されていた仁王会定は内裏犬死穢のため延引され、二五日に開かれた。まず右大臣藤原公季によって行事・装束堂・装束僧房が定められた。行事構成は大納言実資、中納言藤原行成、参議源道方・源頼定、右中弁藤原定頼、右少弁藤原資業、大外記文義、史光貴・伴惟信である。⁽⁷⁾装束堂および装束僧房は式場の装束に関わる人員であって、関連官司の五位・六位各三人が選ばれた。⁽⁸⁾また公季は日時については行事が定めると思い行事文のみ摂政に奏したが、本来は陰陽寮の日時勘文もあわせて奏すべきであり（『西』七「加三日時勘文」）、⁽⁹⁾あとから「来十月八日、癸酉」との日時勘文を奏した。⁽⁹⁾

行事文と日時勘文が返された後、公季は退出し、ついで検校実資のもとで詳細が定められる。祝願文については摂政頼通の意向により、文章博士大江通直に作成させることとなった。ついで陰陽寮に行事所始日時を勘申させ、「今月廿七日、壬辰、時未二点」との勘申を得た。翌日「天慶例」に倣い行事所を陰陽寮に点定した。⁽¹⁰⁾

(2) 行事所始

八月二七日、陰陽寮庁において仁王会行事所始が行われた。天慶以来この儀には行事のうち参議以下のみの参入が通例であったが、⁽¹¹⁾今回は参議以上が故障と称して参入しないため、実資自身が参入することとなった。

陰陽寮庁では実資、大外記文義、史光貴・伴惟信が座につき、右

中弁定頼と右少弁資業も追参。まず呪願文の文句「已及明年」について摂政の意見に従い、「村上度」呪願文のごとく「膺錄明年」と直すよう通直に指示した。¹²このあと行事所では饗饌・勸盃があり、行事所請奏三枚が奏された。また「以_レ其日可_レ修_レ会、兼_レ当_レ彼日可_レ禁_レ殺生_レ之由也。壹岐対馬二島、只禁_レ殺生」(北五)ため諸国に給う官符を作らせた。これは翌二八日の政で請印され、呪願文と重ねて諸国に下された(北五)。

(3) 僧名定

九月二六日には僧名定が行われた。仗座についた実資以下は、まず定文に入れるべき会場について協議した。例では「京中卅一講」(西七)、「京中卅一堂」(北五、「江」一五)で修すが、会場数は増減があり、たとえば「後三条度」の会場は、清涼殿・紫宸殿・大極殿・豊楽殿・武徳殿・朱雀門・羅城門・両院・四后・春宮・太政官・外記庁・中務省・式部省・民部省・兵部省・大蔵省・宮内省・左右京職・左右近衛府・左右衛門府・左右兵衛府・東寺・西寺・聖神寺の計三三ヶ所であった(江一五)。¹³なお院宮が多い場合は八省中を停めるか(西七)、諸司を減らし(北五)、会場数が調節された。今回は前回「三条度」の「長和二年定文」によって定められたが、そこから三条院服中(五月九日崩御)の院宮(中宮藤原妍子・皇后宮藤原城子・小一条院)を除き、かわりに神泉苑と左右京職を加えた。

ついで南座において「代々一代仁王会定文」「僧綱・阿闍梨・諸寺名僧帳」を参照し僧名定を行う。「長和二年定文」をもとに死去・隠居者を改め補したが、僧数については前例のとおりに「中殿・

南殿・皇太后宮・春宮皆有^(教良)七僧、自余三僧」とした。「七僧」とは法会に参列する僧のうち、「講師、読師、呪願、三礼、唄、散花、維那」(延喜式)玄蕃寮式仁王会条である。「三僧」とある講所では、講師・読師・呪願師の僧名のみ行事所が定め、残りの法用僧は綱所から僧名を注進させた。¹⁴

(4) 仁王会までの準備

A 僧闕請補

僧名定では死去・隠居を考慮して僧名を定めたが、さらに死去・遠行・隠居・服による辞退者が出る。これらは綱所がまとめて辞書を提出するか注進する事になっていたが、闕請を補うのに時間がかかるうえ、前々から綱所が辞書を受け籠めて法会当日に提出するようなことがよくあったので、一〇月に入ると実資はしきりに綱所に督促している。

そして一〇月四日、南座において仁王会僧闕請補が開かれ、辞書による者や綱所から遠行中との申し出があった者など計一二人の替を補した。六日には実資邸にて闕請補と転請(役目や場所の変更)を行い、七日も実資邸に数枚の辞書がもたらされ補している。なお今回は式当日も闕請補がなされたが、仁王会では毎回当日まで闕請補が繰り返された。

B 法用・諸堂勅使・堂童子

「法用」行事所が僧名を定めて請用する高僧のほか、法用も事前に決定される。法用については綱所が交名を行事所に提出することになっていた。しかし「綱所定進諸堂法用」¹⁵、
維那等所司請用、近例、綱所不知、所司皆請用、云々、

〔北〕五とあるように、当時は綱所でなく、会場となる所司が請用するのが例であったという。今回は「御在所・南殿・宮々」以外の法用は綱所が注進し、その交名を行事所に提出させることになった⁽¹⁵⁾（一〇月二・四・六日条）。

〔諸堂勅使〕仁王会当日、諸堂に遣わされ講師以下の僧に講を修することを仰せる役である⁽¹⁶⁾。諸堂勅使も行事所によって選定されることになっており〔西〕七、〔江〕一五、実資は一〇月二日、外記に諸堂勅使の夾名を進めさせ、弁官方に廻催させた。今回は八省に輔、左右京職に亮、諸衛に佐が充てられた⁽¹⁷⁾。なお太政官と外記庁は少弁・少納言を充てる例であり、院宮については〔後朱雀度〕に中宮勅使を亮が務めている〔行親記〕⁽¹⁸⁾。

〔堂童子〕散花・行香の際に補佐を務める役である。諸堂堂童子については校書殿と大学寮が候補者を差し進め、行事所が定める例であり〔西〕七、〔北〕五、〔江〕一五、今回も前例のとおりに定めた（二〇月六日条）。〔後朱雀度〕には太政官候庁堂童子を史生が（〔行親記〕、〔近衛度〕には太政官庁堂童子を召使が務めている（〔重憲記〕。なお大極殿・紫宸殿・院宮は五位以上の殿上人が務めることになっており、二日に「大極殿・南殿堂童子」を廻仰せた⁽²⁰⁾。また清涼殿では五位蔵人を一人は用いる例であった（〔江〕巻五（仁王会同禁中儀））。

C 仁王会大祓

仁王会に先立ち八省院東廊で大祓が行われる。実資は一〇月二日に大祓日時を勘申させるよう仰せ、仁王会前日七日に日時勘文が進

められ、同日に八省院東廊（日本紀略）で行われた⁽²²⁾。なお実資は大祓に参じていないが、納言は参加しないのが通例であった⁽²⁴⁾。

(5) 仁王会当日の儀

A 大極殿の儀

一〇月八日、実資は早朝自邸で僧闕請補を行った後、発願（巳二点）に合わせ辰終頃に「八省院東廊座」（大極殿南東の昭訓門外南掖座）に参じた。行事中納言行成は未刻に遅参。参議頼定は摂政室隆姫長谷参詣随行的ため、道方も造宮所に候じて所労と称し、共に不参であった。

〔諸司・僧の参否〕東廊座に着いた上卿は外記を召して図書寮官人と堂童子の参否を、弁を召して僧の参否を問い、参入していない者を催促する（〔江〕巻一三（於大極殿被行臨時仁王会儀））。

〔諸堂巡検〕鐘を打つ前に八省院諸堂の装束を巡検する。ただし実際の巡検は参議以下に任せ、納言は大極殿から遥望する場合もある⁽²⁵⁾。

〔打鐘〕刻限になると上卿は、大極殿の西登廊東第二間（〔江〕一三）に懸けてある鐘を打たせ、会の開始を告げる⁽²⁶⁾。今回は弁資業が図書寮に命じたが、しばらくしても打たれない。召使に鐘所まで見に行かせるとまだ鐘が運ばれておらず本寮にあるとのこと。数刻のち漸く鐘が打たれ、召勘された図書寮官人は「先に紫宸殿の御装束をしていた」と弁解した。

〔着座〕公卿、弁・少納言・外記・史、僧侶らがそれぞれの座に着す。公卿が大極殿南庇「堂前座」に着したのち請僧が着座する例だが、今回は先に請僧が着座していた。本来なら僧を退下させ再び参

上させるべきだが、「可^レ無^レ便」⁽²⁸⁾との理由でそのまま始めた。

「朝講」講師・読師が高座に着して開始。ときに申尅、すでに結願（申二点）時刻であった。ついで図書官人または内舎人に率いられた堂童子が「堂童子座」（南階下の庭中座）に着す（『江』八（秋季仁王会）、『近衛度』『重憲記』）。このあと唄・散花・行道・講説など一連の法要が行われ、堂童子は散花前に殿上に昇つて花筥を配り、終わると花筥を収めて元の座に戻る。朝講が終わると行香となる。公卿以下が「東、^{公卿、不具}西、^{弁、少納言、行事弁必在此方、不具}外記・史・堂童子、或及六位外記・史」⁽²⁹⁾（『江』八）のように左右に分かれて香をもち、図書寮官人が火舎を取つて（『六条度』『兵範記』）、僧に焼香させる。人数の都合で片行香となる例も多く、今回も二人足らず一方行香となったが、西座と東座の両方の僧に行香した。『六条度』も「無人」により左方行香のみである（『兵範記』）。

「夕講」大極殿朝講が終わると上卿は参内し、清涼殿もしくは紫宸殿の儀に参列する例であった。⁽³⁰⁾しかし実資は「近代は公事を疎かにする者が多く、もし上卿が早く参内すれば、夕講の堂童子が必ず闕怠をなすであろう」として、夕講の堂童子役を見届けてから参内した。⁽³¹⁾なお行事弁以下は夕講行香完了まで大極殿に残り、その後参内した（『江』五）。

B 清涼殿・紫宸殿・諸宮の儀

「清涼殿・紫宸殿の儀」大極殿儀に奉仕する行事以外の公卿は、清涼殿もしくは紫宸殿の儀に参列した。上卿以下が着陣し、⁽³²⁾外記に僧具不を尋ね、弁に鐘を打たせたあと、紫宸殿儀に参列する納言・参議各一人（当日参内した者のうち最下臈の中納言・参議各一名）⁽³³⁾を定める。

今回は中納言藤原経房と参議藤原朝経が紫宸殿儀に候じた。

その他の公卿は清涼殿儀に参加するため陣座から階下を経て殿上に着す。また弁官以下も右青瑠門から出居座に着く。ついで公卿が御前座に着き、威儀師に率いられた諸僧が仙華門から入り御前座に着く（詳しくは『雲図抄』三月・仁王会）。あとの儀は大極殿儀とはほぼ同様であるが、左右近衛府が候ずる点や堂童子のうち一人は五位藏人を用いる点、行香で火舎を取る役を行事藏人が務める点などが異なる。同刻、紫宸殿でも出居が東西階から、公卿が東階から、諸僧が西階から参上し、堂童子が庭中の座につき講が開始された。

「上卿以下大極殿から参入」大極殿朝講が終わると行事上卿以下は「脩明・陰明・月華門」を経て左仗座に着き（註29の『西』七）、清涼殿儀もしくは紫宸殿儀に参加する。⁽³⁴⁾実資以下が参内すると清涼殿朝講が終わるところで、しばらく殿上に候じたのち、夕講に参列した。

「諸院宮の儀」清涼殿・紫宸殿儀に参列した公卿は夕講終了後、諸院宮儀に参加する。実資は清涼殿夕講行香を済ませた後、摂政頼通とともに皇太后宮（彰子）、ついで春宮（敦良親王）⁽³⁵⁾に参り行香に加わった。なお諸宮大夫は清涼殿儀を中座し、本宮仁王会を執り行う。⁽³⁶⁾

そして当日もしくは数日後に僧侶に布施として頒ち、⁽³⁷⁾諸堂からの後奏を奏上して、検校の役目は終了した。平安中後期の仁王会はおむね以上のように進められた。

第二章 仁王会儀式空間の変化

前章では寛仁元年(一〇一七)一〇月に行われた後一条天皇一代一度仁王会の準備過程から当日までの儀式次第を、『小右記』に記載された検校実資の行動を中心に検討してきた。一代一度以外の仁王会も会場等に違いはあるが、儀式次第はほぼ共通している。こうした平安中後期の仁王会儀式の特徴は、大極殿・清涼殿・紫宸殿をはじめとする宮中殿舎や各省、さらに諸院宮など多数の会場で同時に行われたことであるが、このうち本来、仁王会儀の中心であったのは、検校以下の行事が参列して執り行う大極殿の儀であったと考えられる。

しかしながら前章(5)にあげたとおり、平安中期には行事公卿は大極殿の朝講行香後もしくは夕講の堂童子の役目を見届けると大極殿を離れて参内し、御前もしくは紫宸殿の儀に参加することになった。またその他の公卿の大極殿儀参列はほとんど見られない。大極殿にもとくに公卿が派遣された寛仁二年三月四日臨時仁王会では、輕服中につき大極殿でなく紫宸殿に参列した参議資平について「雖_レ下_レ臈_レ不_レ参_二大極殿_一」と記されている(『小右記』)。大極殿には紫宸殿よりもさらに下臈の公卿が遣されるものであったらしい。このように公卿参列の点からいえば、平安中期以降の仁王会において大極殿はそれほど重視された会場とはいえず、最も重んじられていたのは清涼殿儀であったといえよう。

天皇の御在所である清涼殿へ儀式の中心が移ることは、平安中期

の宮中儀式にしばしば表われる空間的変化である。一代一度仁王会における大極殿の地位が一〇世紀後半低下することは、すでに垣内氏が僧数の変化の点で指摘されているが、ただしこれは一代一度仁王会に限らず、その他の仁王会にもあてはまる変化である。また講開始の基準となる鐘の面からも同様の変化が指摘できる。

さらに平安中後期には諸院宮儀も重視されてくる。院宮増加にもなつて他会場を削り、また諸院宮儀に公卿が巡回参列するようになる。これが仁王会における第二の空間的変化と考えられる。

以下本章では、平安中後期の仁王会におけるこうした二段階の空間的変化、すなわち(1)大極殿から清涼殿への重心の移動、

(2) 諸院宮の重視について考察することとする。

(1) 大極殿から清涼殿への重心の移動

A 僧数

前章(3)で触れたように、一代一度仁王会では会場によって七僧または三僧が僧名定で定められた。〔後一条度〕では「前例」のごとく「中殿・南殿・皇太后宮・春宮皆有_二七僧_一、自余三僧」(『小右記』九月二十六日条)とされており、大極殿は三僧であったと考えられる。以後の実例や、『江』一五「南殿・中殿・諸院・諸宮、_{各七}僧、自余皆三僧」でも同様である。

ただし『延喜式』玄蕃寮式仁王会条によれば、一代一講仁王会には大極殿以下の会場に「請_二七僧_一」一、講師、説師、呪願、三、礼、唄、散花、維那、と見える。また

〔花山度〕も「紫宸殿・大極殿等請僧、乍_二七僧_一」官囑請、自余堂囑請三僧」(『本朝世紀』)とある。『西』七の頭書にも「京中卅一講、

御前・南殿・大極殿・院宮、七僧、一人維那。武徳・豊楽殿・官・外記・八省・諸衛・東西寺・朱雀門・羅城門・聖神寺、三僧」と記されている。すなわち一〇世紀後半までは大極殿も七僧を唄請していたが、のち三僧へと減らされたのである。

この点についてすでに垣内氏が「大極殿の儀の地位の低下は明らか」で「儀礼の実質的な中心が天皇不在の大極殿から天皇が居る内裏へと移ったことを意味する」と指摘されている（註1論文）。ただし大極殿の地位の低下は一代一度に限ったことではなかった。

『西』巻七〈臨時仁王会〉には「南殿・御前・大極殿七僧。余三僧」とある箇所。「見旧定文等」大極殿三僧」と頭注がある。すなわち従来は臨時仁王会でも大極殿に七僧が充てられたが、一〇世紀後半までに三僧へと変更されたのだろう。

B 打鐘

清涼殿儀が仁王会の中心となっていたことについては、講の開始を合図する鐘にも表れている。大極殿儀では講師・読師が高座に昇ったあと、もしくは刻限になれば僧が揃わなくても鐘が打たれた（前章（5）A）。清涼殿をはじめとする諸堂にも鐘は備えられており、清涼殿の鐘は弓場殿に懸けられ、「上卿以下着陣、（中略）仰令打鐘、（中略）諸堂応之、皆打之」（『江』五〈禁中儀〉）のごとくこの鐘の音に応じて諸堂の鐘が打たれる例であった。すでに長保三年（一〇〇一）閏一二月三日臨時仁王会でも、「右大臣以下候杖下之間、打諸堂鐘」。先例雖打大極殿之鐘、宮中鐘待上仰令打、而無仰令打之由、可尋問者」（『小右記』）とあるよう

に、清涼殿の鐘は大極殿の鐘とは別に、清涼殿儀の上卿の指示により打たれ、それに応じて諸堂の鐘が鳴らされるのが「先例」であったという。

ただし従来、各会場の鐘は刻限に一斉に鳴らされるものであったらしい。久安三年（一一四七）七月一六日仁王会において藤原頼長は勘文時刻どおり鐘を打たせたが、「仁王会、雖事不具、守勘文刻、令打鐘、是礼也。近代不守時刻、事具後、經奏聞令打鐘、非礼、仍余保古礼所行也」（『台記』）と記す。「古礼」では勘文時刻に鐘を打たせたのに、「近代」は刻限を守らず準備が整ってから奏聞を経て打たせるようになっていたという。おそらく一〇世紀後半までに清涼殿儀の位置づけが高まったことで、清涼殿の鐘が全会場の基準とされたのだろう。

平安中後期においても仁王会の大極殿儀は検校によって執り行なわれていた。しかし公卿参列の点や、本節ABで指摘したように、一〇世紀後半には清涼殿儀が重視されるようになっていた。平安中期以降、儀式の中心が大極殿から清涼殿へ移るという変化については、ほかにも朝賀よりも小朝拝が優勢となっていくこと等が指摘されており、天皇との私的関係が貴族社会の構成原理になったことによる変化と見なされている⁴⁰。仁王会の変化も同様に、貴族にとって天皇との関係がより重視されるようになった結果であろう。

(2) 諸院宮儀の重視

A 京中会場の調整

一代一度仁王会における京中の会場については、『延喜式』玄蕃寮式仁王会条には大極殿、紫宸殿、後宮院、東宮などの「宮中諸殿、省寮等庁」で行われるとあり、「光孝度」には太上天皇宮(陽成院)をはじめとした仁寿殿・諸門・院宮・諸司・諸寺・中務省・神泉苑など京中三三講が開かれたことが知られる(西七)。平安中後期には三ヶ所が基本であったが、院宮が多い場合は八省を停めるか、諸司を減らして調節された。〔後一条度〕では三院宮を除くかわりに、神泉苑・左右京職を加えている(前章(3))。

ところで「花山度」の会場は以下の「京中卅三堂」で行われたという(『本朝世紀』)。

清涼殿 朱雀門 紫宸殿 大極殿 武徳殿 豊楽殿 羅城門 太政官
 庁 弁少 内庁 中務 式部 治部 民部 兵部 刑部 大蔵 宮内省
 左右近衛府 左右兵衛府 冷泉院 左右衛門府 朱雀院 皇太后
 宮職 中宮職 春宮坊 東寺 西寺 観神寺

このうち「弁少」については国史大系本の頭注に「卅三堂、数不全。蓋有誤脱。或云弁有左右両堂。少、恐誤写。」とされるが、もしくは太政官内部局である弁官局と少納言局を指すとも考えられる。太政官内の会場に関しては「後朱雀度」『行親記』に「太政官候庁、修仁王会、(中略)於中世六講之内一講朝夕二座所修如件」とある。すなわち従来は太政官各部局で計六講が催されたが、「中世」にはうち一講のみ行われたという。以後の実例でも太

政官庁内では一講しか行われていない(註18。外記庁は除く)。太政官庁内会場の一講への集約は院宮増加による措置と考えられ、「花山度」は過渡期の状態なのであろう。

平安後期になるとさらに院宮が増加したため、「後三条度」以後は三三ヶ所に及んだとい(『兵範記』仁安二年(一二六七)一〇月三〇日条)、実際「後三条度」は両院・四后を含む計三三堂で開催された(前章(3))。〔六条度〕には「院、皇嘉門院、上西門院、八条院、高松院、太皇太后宮職、皇太后職、皇后宮、中宮、春宮坊」を入れると三七堂になってしまうため、武徳殿・豊楽殿・治部省・民部省が除かれ、三三堂に調節された。しかし次の「高倉度」は「去々年豊楽殿・武徳殿被除棄、違例不吉也」との理由によりこの二箇所は戻され、八院三宮を含む計三六堂で開催されている(『兵範記』嘉応元年(一二六九)一〇月二八日条)。

以上のように一代一度仁王会では平安中後期にかけて、院宮での開催を優先するために太政官内の会場が集約されたり、神泉苑・左右京職・各省・宮中殿舎が除かれたりして、会場数が調整された。院宮儀がより優先された結果であろう。

B 公卿の参列

院宮儀が重視されていたことは、会場選定の面だけでなく、公卿の参列の点にも表れている。諸宮大夫は清涼殿儀を中座して本宮仁王会に向かうが、一一世紀初頭からは宮司以外の公卿も院宮儀に分参して行香に加わるようになった。

早くは永祚元年(九八九)五月二三日臨時仁王会で「打夕講鐘

一、此間公卿又参^{（藤原詮子）}上殿上^{（藤原詮子）}。一両公卿参^{（藤原詮子）}入皇太后宮^{（藤原詮子）}。行香了晚景各退出^{（『小右記』）}」のように、夕講が始まる前に一、二名の公卿が皇太后儀に参入したとあるが、註35の例と同様、この公卿もおそらく宮司であろう。さらに長保二年六月二五日仁王会では「今夕依^{（藤原定子）}仰、差^{（藤原定子）}侍臣四・五人、令^{（藤原定子）}参^{（藤原定子）}皇后宮行香^{（藤原定子）}」（『権記』）のように殿上人が遣わされたとのみで、公卿の参列は見えない。

宮司以外の公卿が諸宮行香に分参するのは、一条朝の中宮藤原彰子から恒例化するのである。参議行成は長保三年閏一二月三日臨時仁王会で紫宸殿儀のあと中宮御方に参じ、四年四月二日、五年九月一九日、寛弘三年（一〇〇六）五月二日、六年二月二五日の各仁王会でも中宮行香に参じている（『権記』）。道長の権力強化と深い関係があると考えられる。

道長外孫である敦成親王（後一条）が東宮になると、東宮仁王会にも宮司以外の公卿の参列が恒例化する。「三条度」では夕講行香の終了後、「左大臣・右大臣・内大臣及諸卿」が東宮（敦成親王）に参じた。「後一条度」では上卿実資が大極殿から参内して清涼殿儀に参列したあと、摂政頼通とともに皇太后宮（彰子）仁王会行香と春宮仁王会に参じて行香した（以上『小右記』）。一代一度以外でも、寛仁二年三月四日臨時仁王会では御前夕講行香のち右大臣公季以下は太皇太后（彰子）、東宮（敦良親王）に参り（『小右記』）、翌年三月一六日仁王会では「内行香後、初摂政・左右大臣候・大宮・中宮・東宮行香」（『御堂関白記』）とある。万寿二年（一〇二五）六月二一日仁王会では「上達部相分参^{（藤原公季）}中宮・東宮^{（藤原公季）}行香」（『左経記』）という。

筆者は以前、東宮行啓行列に一〇世紀後半からは宮司以外の近習公卿も扈從するようになり、さらに道長政権以後は多くの公卿が前驅まで務めるようになったことを指摘した。一〇世紀後半の貴族社会では宮司という官制上正式な従属関係に加え、公卿と東宮との個人的関係も重視されるようになり、さらに道長政権の強化が契機となつてこうした行列の変化がもたらされたのである。仁王会の儀においても、宮司以外の公卿が中宮や東宮の仁王会に参列するようになったのは、貴族社会で個人的関係が重視されるようになったこと、さらに道長政権が強化されたことによるものと考えられる。

さらに院政期になると公卿は上皇や女院の仁王会にも巡回するようになる。天永二年（一一〇〇）三月二七日春季仁王会で権中納言藤原宗忠は堀河院での中宮（藤原璋子）仁王会、三条院での皇后宮（令子内親王）仁王会、六条院での白河法皇仁王会の各行香に参列した。大治二年（一二二七）三月一〇日春季仁王会で権大納言宗忠は御前儀を終えたのち、三条亭西对代南面での本院（白河）仁王会、東对西面の新院（鳥羽）仁王会、寝殿南面の待賢門院仁王会の順に参列している（以上『中右記』）。久安三年七月一六日仁王会では内大臣頼長が「皇太后御方、高陽院、一院、^{（藤原泰子）}新院^{（崇徳）}」を巡回し行香した（『台記』）。なお公卿は仁王会の会場となつた院宮すべてを巡回したわけではなく、権勢のある院宮に多く参集している。

こうした院宮仁王会は通常、内裏儀と同時に開始されたが、行香だけは公卿の参列を待って行われた。早くは「後一条度」においても、皇太后宮仁王会行香が「待^{（藤原公季）}上達部之参入^{（藤原公季）}被^{（藤原公季）}結願^{（藤原公季）}」と見え

る。久安五年六月二〇日の仁王会では、「所々仁王会各守_二吉時_一」始_レ之、其後僧侶不_二退出_一、相_レ待公卿参会_二有_二行香事_一、是常例也」〔本朝世紀〕とあるように、仁王会自体は時刻を守って始め、講が終わっても僧侶は退出せずに待ち、公卿参入ののち行香を行うのが「常例」であつたという。大治五年九月一九日秋季仁王会でも鳥羽上皇と待賢門院の仁王会行香は、内裏から直接参入する公卿や侍臣のほか、皇后宮（令子内親王）仁王会および中宮（藤原聖子）仁王会に参列した公卿が揃うのを待つて行われた（『長秋記』）。なお参列公卿が少ない場合は行香自体が中止されている。⁽⁴²⁾

公卿はこうした院宮仁王会に内裏から向かうのに便利な「順道」で廻つたが、公卿巡回の便を優先するあまり、院宮仁王会が先に開始された例まで見られる。久寿元年（一一五四）七月二六日秋季仁王会では高陽院仁王会について、「院宮与_二内裏_一同時行_レ講、設_レ礼也。而戸部参入曰、内裏、新院、皇太后、院、是順道也。此院非_二順道_一、自_二内裏_一参、非_レ無_二事煩_一。此院行香参内、雖乖_レ礼可_レ省_二事煩_一者。従_二彼命_一耳」〔台記〕とあり、本来なら内裏と院宮の仁王会は同時に始めるべきだが、高陽院は内裏からの「順道」に外れていて不便である。よつて高陽院行香を先に済ませてから参内したという。

以上のように院政期に公卿がより多くの諸院宮仁王会に巡回するようになった原因は、ひとつは権力構造の変質であろう。院政期には上皇・天皇を中心とする天皇権力が拡大・集中したため、公卿は内裏に伺候するだけでなく、院宮との個別の直接的な関係も重視さ

れるようになった。こうした院宮との関係を強化・再確認するために、院宮司以外の公卿も複数の重要な諸院宮仁王会に巡回するようになったと考えられる。また院宮側からすれば公卿を行香に参列させることで儀式を権威付け、また自らの権威の下に公卿が従う様を視覚的に表したいという狙いがあつたと思われる。公卿の揃うのを待つて行香を行い、揃わなければ行香自体を中止するというのはそのためであろう。

さらに国家と仏教との関係の面からいえば、院政期には仏教が社会統合の原理として重要性を増したことが指摘されている。⁽⁴³⁾ 仏法の興隆によつて王権強化を図らんがため、宮中だけでなく上皇・女院でも盛んに仏事が営まれ、御願寺が相次いで創建された。従来、仁王会・御齋会・季御読経という三大国家仏事以外の仏事は私的仏事として行われていたが、院政期以降、御願寺仏事などは院司とともに上卿・弁等が行事として主導することで国家的仏事へと転換した⁽⁴⁴⁾ という。また院政期には貴族の日記に仏教関係記事が頻出するが、これは寺院造営や仏事法会が重要な政治であつたことを示すとされる。⁽⁴⁵⁾ 仁王会においても平安中後期以降、院宮司以外の公卿が院宮儀行香に参列することによつて、院宮儀が清涼殿儀にも匹敵する公的格付けが与えられたとみなせよう。

以上のような権力構造の変化および仏教の役割の変質によつて、院政期には仁王会儀式空間が院宮にまで拡大したのである。

おわりに

本論では平安中後期の仁王会を宮中儀式のひとつとして考察し、第一章では後一条天皇一代一度仁王会の儀式次第を他の実例や儀式書の記述とあわせて検討、第二章では平安中後期の仁王会に生じた二段階の空間的变化について指摘した。

平安中後期における仁王会儀式空間の変遷を参加公卿との関係でまとめると、以下ようになる。従来、大極殿を中心として開催されていた仁王会は、一〇世紀後半までに清涼殿に重心が置かれるようになった。天皇との私的関係が貴族社会の構成原理になったことによるものであろう。一方、同時刻には諸院宮でも仁王会が催されていたが、従来は院宮司以外の公卿が参列することは多くなかったと思われる。それが一一世紀初頭からは、中宮および東宮仁王会行香に、宮司以外の公卿も参列することが恒例化した。これは貴族社会での個人的関係が重視されるようになったことに加え、道長政権強化が契機となったと考えられる。さらに院政期になると、公卿は上皇や女院など何箇所もの仁王会を巡回し行香に参列するようになる。このことは院政期には上皇を中心とする天皇権力が拡大し、公卿にとって院宮との個別の関係も重視されるようになったこと、また仏教が王権を支える統治理念として重要性を増したために、院宮儀が清涼殿儀に匹敵するほどの公的格付けを与えられたことを意味する。

仁王会の儀式空間の変化は、平安中後期における貴族社会権力構

造の変質、および仏教の役割の変化を如実に表していたのである。

【註】

(1)

「臨時仁王会」は天変・旱魃・怪異・疾疫・三合厄・賊徒降伏の祈禳、造宮などに際し臨時に実施された。「春季・秋季仁王会」は春秋に行なわれた年中行事で、早くは『小野宮年中行事』二月・七月に見える。ただし「春季・秋季仁王会」は必ずしも二月と八月に実施されたわけではない。「臨時仁王会」「春季・秋季仁王会」とも単に「仁王会」と記されることが多く、両者の区別がつかないことも少なくない。「秋季臨時仁王会」(『小右記』長元四年(一〇三二)八月九日条)とも記される。また撰関期には「春季仁王会」「秋季仁王会」と記載する史料はまれで、明記されるようになるのは院政期以降である。「或一代一度仁王会之外、春秋共称臨時云々」(『先例、多注』春季仁王会)。以「秋季」注「臨時」(『玉葉』嘉應二年(一一七〇)二月二日条)のごとく、春季・秋季と臨時仁王会の区別は曖昧だったらしい。

(2)

「二代一度仁王会」は「大仁王会」「代始仁王会」とも呼ばれ、平安中後期の事例では大嘗会の翌年に開催されることが多い。確実な初見例は『菅家文草』卷一二所収の光孝天皇一代一度仁王会祝願文である。創始時期については諸説あり、垣内和孝「二代一度仁王会の再検討」(『仏教史学研究』四〇・一一、一九九七年)にまとめられている。同氏が指摘されたように、『延喜式』太政官式仁王会条「凡天皇即位、講説仁王般若經、一代設百高座、一日朝哺講畢。預任行事司、中納言一人、参議及弁各一人、五位二人、六位以下臨時定之。五位以上奏任、六位以下中大臣任。」の上に「弘」と頭書され、弘仁式にも規定されていたとわかる。

ただし平安中後期には「大臣奉勅定行事」(大納言一人、中納言一人、参議二人、外記二人)、「故実叢書『西宮記』卷七(二代一度仁王会、以下『西』七)、「大臣奉勅、勘二日時一定行事九人」(大納言一人、中納言一人、参議二人、外記二人、史二人)、「故実叢書『北山抄』卷五(二代仁

- 王会事」、以下「北」五、「定」行事九人、大納言二人、中納言一人、参議一人、弁一人、外記一人、史二人、以上一紙、」(故実叢書『江家次第』巻一五「一代仁王会」、以下「江」一五)のように行事構成が大納言以下となり規模も拡大する。また貞観二年(八六〇)四月二十九日の仁王会(「一代一度」とは記していないが、清和天皇大嘗会の翌年で一代一度の可能性が高い)でも行事構成は大納言一人以下であった(『日本三代実録』)。一代一度仁王会の規模や格付けは、九世紀後半以降に拡大・上昇していったものと考えられる。
- (3) 『北』五および『江』一五。『六条度』『兵範記』仁安二年二月二日条。『崇徳度』『永昌記』大治元年三月二日条。
- (4) 大極殿、紫宸殿、諸院宮などで単独に催される仁王会もある。
- (5) 仁王会の研究史については、堀一郎「仁王会」「一代一講仁王会」(同『上代日本仏教文化史』上巻所収、大東出版社、一九四二年、難波俊成「わが国における仁王会受容過程の一考察」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』一九七三・一九七四所収、一九七三・七四年)、瀧川政次郎「踐祚仁王会考(上)(下)」(『古代文化』四〇・一一・四一、一九八八・八九年)、同「二代一度の仁王会考」(同『律令と大嘗祭―御代始め諸儀式―』所収、国書刊行会、一九八八年)、佐藤眞人「皇位継承儀礼と仏教」(『歴史手帳』一八一、一九九〇年)、佐々木宗雄「王朝国家期の仏事について」(同『日本王朝国家論』名著出版、一九九四年。初発表は一九九三年)、中林隆之「護国法会の史的展開」(『ヒストリア』一四五号、一九九四年)の各論考が垣内氏註1論文にまとめられている。その後、中林隆之「日本古代の仁王会」(『正倉院文書研究』六号、一九九九年)が七世紀後半から八世紀の仁王会について考察された。
- (6) 「大臣奉_レ勅、勘_二日時_一、定_二行事九人_一(注略)・装束堂六人(注略)・装束僧房六人(注略)」「(北)五。なお春季・秋季や臨時仁王会は大臣によらず上卿が行う。
- (7) 臨時仁王会の行事構成は規模が縮小された。長和四年五月一日仁王会の行事構成は、大納言・参議・少弁・大史・少史が各一人である(『小右記』六日条。また同日条に「行事定文不_レ奏之例也」とあるように、奏するのは参議以上を記した「檢校文」のみであった。
- (8) 「堂莊嚴六人、五位三人、装束六人、五位三人、六位三人、」(『西』七、「装束堂六人、五位三人、六位三人、」(同『用_二縁事諸司判官已上_一』)、「装束僧房六人、」(『北』五。前回「三条度」にも、装束堂に内蔵頭・掃部頭・図書頭・主殿権助・図書允・内匠少允、装束僧房に木工頭・主殿頭・大蔵大輔・内匠助・大蔵丞・掃部允といった関係官司の判官以上が充てられている(『小右記』長和二年三月二六日条)。
- (9) 日時勘申文は(近衛度)『重憲記』康治三年正月二日条、(六条度)『兵範記』仁安二年二月二日条、(高倉度)嘉応元年二月一三日条裏書等に書様が挙げられる。
- (10) 「陰陽寮為_二行事所_一」(『西』七、「天曆元年、用_二陰陽寮_一、近例或官東庁」(『北』五、「官東庁」(『江』一五)。
- (11) 「上卿着_二行事所_一。近代不_レ着」(『西』七、「天曆以後、上卿不_二必就_レ之_一」(『北』五・『江』一五)。
- (12) 翌日も道長の難により通直を自邸に召して改めた。仁王会祝願文はしばしば訂正され、「三条度」も「馭世三載、易聰明年」等文、尤有「忌諱者」とある(『小右記』八月一日条。なお祝願文の実例については、『菅家文草』巻一二に「光孝度」他、『小右記』に「三条度」『朝野群載』巻二に応和二年(九六三)三月二五日仁王会のもの収載されている。
- (13) うち「両院・四后」とは、上東門院藤原彰子・陽明門院頼子内親王および太皇太后章子内親王・皇太后藤原寛子・皇后藤原歆子・中宮馨子内親王である。なお一代一度以外の会場については、長和四年五月一日臨時仁王会では大極殿百高座のほか「南殿并中殿・太皇太后宮・皇太后宮・中宮・皇后宮・東宮・神社・吉祥院等」で行われ(『小右記』六日条、承徳二年(一〇九八)八月二十九日秋季仁王会は註38の会場で催された。
- (14) 「江」一五に「近例大臣先令_レ勘_二日時_一之次便定_レ之」とあり、院政期は日時勘申日に僧名定も行った。『崇徳度』(『永昌記』二月二九日条)・「六条度」(『重憲記』正月二日条)も同日。
- (15) 「天慶記文」には「法用者、除_二綾綺殿・紫宸殿・太皇太后宮職_一之外、本司請_二用之_一」とあるが「同年外記日記」は「綱所注_二進三綱夾名_一」と

見えるという〔小右記〕一〇月六日条。

- (16) 〔後朱雀度〕『行親記』長暦元年一〇月五日条には、「太政官候庁 修仁王会」講師年蒨(中略)右、於中世六講之内、講朝夕二座所修如件、長暦元年十月五日 勅使正五位下行少納言兼云々」との文書が載せられ、勅使が会の実施を命じていることがわかる。
- (17) 〔近衛度〕でも各省は少輔、京職は亮、衛府は少将・佐クラスの者が充てられている〔重憲記〕天養元年三月二日条。
- (18) 〔後朱雀度〕は太政官候庁勅使を少納言が〔行親記〕、〔後白河度〕は外記庁勅使を少納言が、〔六条度〕は官庁勅使を右少弁、外記結政勅使を少納言が務めている(以上〔兵範記〕)。
- (19) 勅使は一代一度以外の仁王会でも遣された。余為「官司勅使」参「官司」〔左経記〕万寿二年三月八日臨時仁王会、「官勅使権右中弁実行」〔永昌記〕天永元年三月二三日春季仁王会。
- (20) 〔花山度〕紫宸殿堂童子に散位上毛野公之以下が〔本朝世紀〕、〔後朱雀度〕中宮堂童子を右少弁定親以下が務めたことが知られる〔行親記〕。
- (21) 〔六条度〕は蔵人少輔源延俊、〔高倉度〕に蔵人兵部大輔藤原光雅が務めた〔兵範記〕。
- (22) 〔兵範記〕一二月一三日条裏書に〔高倉度〕の日時勘文が掲載される。長和四年五月一五日臨時仁王会では前々日一三日に行われた〔小右記〕。ただし〔江〕卷五〔仁王会定〕に「近例多当日行之故也」とあることと院政期には当日の例が多い。〔近衛度〕〔本朝世紀〕・〔六条度〕〔高倉度〕〔兵範記〕も当日である。
- (24) 〔先一兩日有大祓事、(中略)檢校参議行事、〕〔北〕六・仁王会事。実例でも長和四年五月一五日臨時仁王会は参議道方〔小右記〕、〔近衛度〕は参議藤原忠基以下〔重憲記〕、〔六条度〕は参議源資賢以下、〔高倉度〕は参議藤原家通以下(以上〔兵範記〕)が従事。
- (25) 〔檢校上卿以下、著八省、(中略)或未打鐘之前、上卿率参議以下、一度大極殿壇上、始自西廊、巡檢諸堂装束、或参議以下巡檢上卿於大極殿通望天曆年通待出間三令見之〕〔北〕卷六〔仁王会事〕。永祚元年(九八九)九月二三日秋季仁王会は檢校

- 中納言源伊陟・参議藤原懷忠が諸堂廻見、長和四年五月一五日臨時仁王会は上卿大納言実資が大極殿装束を点検(以上〔小右記〕)。永保元年(一〇八二)三月二四日春季仁王会で上卿源経信は「力已届」により遥望し左大弁以下に巡見させた〔帥記〕。
- (26) 僧が全員揃わなくとも刻限になれば弁に鐘を打たせた。〔刻限已至、仰行事弁、令打鐘〕〔北〕六、「雖僧不具守刻限令打之」〔江〕一三。
- (27) 〔江〕卷八〔秋季仁王会〕、卷一三、卷三〔御齋会始〕等に着座の経路と順序が説明されている。なお今回は雨儀による着座の儀が行われた。永保元年三月二四日春季仁王会では僧侶を退出させやり直させた〔帥記〕。
- (28) 〔朝講了行香、^東上卿以下、經脩明・陰明・月華門階下、着左仗二〔西〕卷七〔臨時仁王会大祓事〕、「朝座行香畢、上卿已下参内如常」〔北〕五。〔三条度〕は御前朝講途中に行事大納言藤原公任以下が八省院から参入〔小右記〕。〔崇徳度〕は大極殿朝講終了時に清涼殿・紫宸殿が結願していたため行事が退出した〔永昌記〕。一代一度以外でも長保四年四月二日臨時仁王会では行事参議行成が大極殿朝座行香を終え参内した〔権記〕。
- (30) 永保元年三月二四日春季仁王会でも〔如旧日記〕者、朝講行香可参内者。而近代夕講行香了後、可参内由被仰下者」と見える〔帥記〕。〔六条度〕では朝講行香のあと上卿が参内するにあたり行事弁平信範に「夕講可行之由」が仰せられ、信範は夕講終了後に参内した〔兵範記〕。
- (31) 〔江〕五の禁中儀に「上卿以下着陣、召外記一問諸司具不」〔後略〕とあるように、清涼殿儀を執り行う「上卿」がいるが、大極殿儀に参会する檢校とは別である。
- (33) 〔定可候南殿之納言・参議各一人、^{若地下人者、件人可着。若当御云々、物忌者、雖下殿龍院之人候御前、}小野宮口伝更不可定、下殿納言・参議各一人、自存其旨、着南殿は輕服者や院宮仁王会に従事する院司・官司を除く。天皇御物忌の場合、前夜から籠候した公卿は下臈でも御前儀に候じ、他公卿が紫宸

- (34) 上卿は清涼殿儀に候ずるほか、紫宸殿儀に参加する場合もあった。長保三年閏一二月三日臨時仁王会では、大極殿儀を終えて参内した上卿左衛門督藤原公任と左大弁藤原忠輔が「金吾候御前」大丞候「南殿」のように分かれて参列した(『小右記』)。また「夕講始間、上卿以下他弁・少納言参内。行事者夕講畢同参内、可参会南殿行香」(『江五』)とあり、行事のうち夕講まで残った者は紫宸殿儀行香に参会するとある。長保四年四月二日臨時仁王会では、春宮大夫藤原道綱と皇后宮大夫藤原公任は御前朝講行香を終えた後、本宮に参じた(『権記』)。
- (35) 『小野宮年中行事』七月・秋季仁王会には「料米三百八十斛三斗、八十斛賀国、百五十石伊予、百五十斛七佐国」とあるが、今回は伊予・加賀の未進が問題となっていた(『小右記』一〇月三日条)。また『小右記』長和四年五月一七日程に臨時仁王会の諸僧布施供養料が見える。
- (36) 『会後三・四日間、諸堂奏進畢』(『北』卷六「仁王会」)。なお『台記』仁平元年二月三〇日程には「奏諸堂奏」(『近代、絶不行此儀』)とあり、院政期には行われなくなっていたらしい。
- (37) 一代一度以外の仁王会ではこのとおりの僧数とは限らず、承徳二年八月二九日秋季仁王会では大極殿が百二口、清涼殿と紫宸殿は威從を入れて七口、一院(白河)七口、中宮(篤子内親王)・二条院・太皇太后(藤原寛子)職・賀茂上下神宮寺・松尾・平野・稻荷三口、大屋寺・石清水・感神寺・吉祥院・北野一口とある(『中右記』)。
- (38) 『春記』長久元年(一〇四〇)五月一九日条、二年二月二五日条。
- (39) 古瀬奈津子「平安時代の「儀式」と天皇」(同『日本古代王権と儀式』所収、吉川弘文館、一九九八年。初出は一九八六年)。
- (40) 拙稿「平安貴族社会の行列―慶賀行列を中心に―」(『日本史研究』四四七号、一九九九年)。
- (41) 大治五年九月一九日秋季仁王会では皇后宮(令子内親王)仁王会行香が

- (42) 「無三人数」により中止された(『長秋記』)。
- (43) 北村優季「京都―古代から中世へ」(佐藤信ほか編『都市社会史』山川出版社、二〇〇一年)。
- (44) 海老名尚「中世前期における国家的仏事の考察―御願寺仏事を中心として―」(『寺院史研究』三、一九九三年)、佐々木宗雄註「論文、古瀬奈津子「天皇と都市空間」(『岩波講座 天皇と王権を考える』第八巻「コスモロジーと身体」、二〇〇二年)。
- (45) 上島享「藤原道長と院政―宗教と政治―」(上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館、二〇〇一年)。
- 〔附記〕本稿は平成一七年度文部科学省科学研究費補助金特別研究員奨励金による研究成果の一部として執筆した。

(のだ ゆきこ) 本学非常勤講師

【表】平安中後期の一代一度仁王会日時

天皇	開催年月日	主な出展
光孝	仁和 1 (885) 4.26	[三][菅][西]
宇多	寛平 1 (889) 4.29※	[紀]
醍醐	昌泰 1 (898) 3.22※	[紀]
朱雀	承平 3 (933) 4.27	[紀][吏(西)]
村上	天曆 1 (947) 4.25	[紀][西][貞][小][北][僧]
冷泉	安和 2 (969) 3.15	[紀]
円融	天禄 2 (971) 5.15	[紀]
花山	寛和 2 (986) 5.18	[紀][世]
一条	永延 1 (987) 9.22	[紀][扶]
三条	長和 2 (1013) 8.19	[紀][小][御]
後一条	寛仁 1 (1017) 10.8	[紀][小][御][左][立]
後朱雀	長暦 1 (1037) 10.5	[行]
後冷泉	永承 2 (1047) 11.30	[扶]
後三条	延久 1 (1069) 12.20	[扶][江]
白河	不 明	——
堀河	寛治 2 (1088) 12.29	[帥][中][二]
鳥羽	天仁 2 (1109) 12.24	[殿]
崇徳	大治 1 (1126) 3.7	[永][中目]
近衛	天養 1 (1144) 3.22	[重][世][台]
後白河	保元 2 (1157) 9.23	[兵]
二条	応保 2 (1162) 4.28	[一]
六条	仁安 2 (1167) 12.22	[兵][愚]
高倉	嘉応 1 (1169) 12.25	[兵]
安德	不 明	——
後鳥羽	文治 4 (1188) 6.30	[兼][玉]
土御門	正治 2 (1200) 12.25	[兼][明][猪]
順徳	建保 4 (1216) 6.20	[兼][百][一]

確実な初見例である光孝朝以後の開催日を掲載した。

※宇多朝と醍醐朝には「一代一度仁王会」「大仁王会」と明記された記事は見
出せないが、日程・記述および垣内註 1 論文に拠った。

[三]日本三代実録、[菅]菅家文草、[西]西宮記、[紀]日本紀略、[吏]吏部王記、[貞]貞信公記抄、[小]小右記、[北]北山抄、[僧]僧綱補任、[世]本朝世紀、[扶]扶桑略記、[御]御堂関白記、[左]左経記、[立]立坊部類記、[行]行親記、[江]江家次第、[帥]帥記、[中]中右記、[二]後二条師通記、[殿]殿暦、[永]永昌記、[中目]中右記目録、[重]重憲記、[台]台記、[兵]兵範記、[一]一代要記、[愚]愚昧記、[兼]兼光卿記(姉言記)、[玉]玉葉、[明]明月記、[猪]猪隈関白記、[百]百練抄